

第1期第2回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成25年2月27日（水）午後2時30分から

会 場：新潟市新津美術館

出席者：

（委員）会長	宮田 亮平	東京藝術大学学長
副会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	大倉 宏	美術評論家
	大島 煦美子	財団法人 新潟県女性財団理事長
	金山 喜昭	法政大学教授
	菅井甚右 <small>ニ</small> 衛門・哲	書人
	野川 彰夫	新潟市立江南小学校校長
	福永 治	国立新美術館副館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	武田 勝治	公募委員
	中村 文香	公募委員

（事務局）

新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館長
	井関 一博	同 副館長
	松沢 寿重	同 主査（学芸員）
	濱田 真由美	同 学芸係長
	大谷 道佳	同 総務係長
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館長
	小林 巧	同 副館長
	山崎 利雄	同 主幹
	大森 慎子	同 主査（学芸員）

次第：

1 開会挨拶 新潟市新津美術館長 横山 秀樹  
新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 会長 宮田 亮平

2 出席者紹介

（1）委員紹介

(2) 事務局紹介

### 3 報告

(1) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の運営方針 について

(2) 新潟市美術館・新津美術館 事業連携 について

(3) 部会での検討結果 について

### 4 議事

平成25年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について

### 5 閉会挨拶

新潟市美術館長 塩田 純一

## 1 開会挨拶

(横山館長あいさつ)

今回の協議会の会場である新潟市新津美術館は、新潟市の市街地から約 20 キロ離れており、緑に恵まれ、県立植物園や「弥生の丘展示館」などに周囲を囲まれ、普段から、文化観光の面ではこれらの施設と連携をとっている。

前回の協議会での両館の運営方針などについてのご意見を受け、検討した内容や協議会後に2回開催された部会についての報告、平成25年度の事業計画について審議いただきたい。

(宮田会長あいさつ)

今日は暖かい日で、親子連れなど、熱心にご覧いただいている。前回協議会での、新津で開催という話が今日実現できたことを大変うれしく思う。

両館には、新潟市の美術館として芸術における大きな役割を果たしてほしいと思うので、委員の皆さまから活発なご意見をいただきたい。

## 2 出席者紹介

事務局より、委員を紹介。事務局の出席者を紹介。

### 3 報告

(1) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の運営方針 について事務局より報告

(2) 新潟市美術館・新津美術館 事業連携 について事務局より報告

(3) 部会での検討結果 について

(金山委員より報告)

部会を2回実施した中でテーマになった「連携」の目的は、両館それぞれの持ち味を生かし合いながら、相乗効果を高めていくことだ。できるものから具体的にやっていくスタンスで討議した。両館から出された連携の案を部会でも協議し、具体的にやれるものを提示した。

今後、部会は年に2回で、連携のあり方を基本的テーマとして継続させるとともに、両館の連携と役割分担についても具体的に館の人たちと話し合っていきたい。

#### 4 議事

##### 平成25年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について

資料に沿って、新潟市美術館の平成25年度の事業計画として、コレクション展、企画展、教育普及事業、各種講座、調査研究事業、収集保存事業、施設普及事業、新潟市美術館大規模改修事業、について事務局より説明。

新津美術館の平成25年度事業計画として、所蔵品展、企画展、教育普及事業、調査研究事業、収集保存事業、施設普及事業(コンサート、シーズン&アート、託児サービス、「こどもタイム」、「あいてマンデ〜」といった独自のサービス)について事務局より説明。

(宮田会長)

新潟市美術館は、教育普及事業の報告など、非常に前向きな動きが感じられた。新津美術館の中でおもしろいと思った「あいてマンデ〜」をもう少し教えてほしい。

(小林副館長)

各企画展の期間中に必ず1回、祝日などではない普通の月曜日を開館し、月曜日しか休みがないという方むけに、平成19年度から実施している。

(大島委員)

次世代を担う子どもたちに芸術を興味深く意識してもらう、学校教育との連携は大事な事業だと思う。新潟市美術館は、市民に親しまれる美術館づくりの項目に明文化されている。新津美術館を見ると、「市民に親しまれる美術館づくり」と「他施設との連携」との中に分かれて記載されているが、この事業に対する両館の重要度を聞かせてほしい。

(塩田館長)

新潟市美術館は、教育普及を、美術館の未来にとって非常に大切な事業ということで一番最初に置き、生涯学習として、成人を対象としたプログラムを置いた。さらに、美術館を支援していただく市民の「美術館協力会」他館でいう美術館友の会に似た組織だが、それ以上にボランティア的な性格を持ち、美術館を支えていただいているサポーターの皆さんである。力を入れていきたい3項目を挙げている。

(横山館長)

新津美術館で学校等への出前は、これまで音楽で行ってきた経緯があり、今後、音楽と美術とをあわせて、新潟市美術館と連携をとった出前美術館を来年度からやっていく。

諸施設との連携では、近くの金津小学校の作品を展示するなどしている。(市の中心から)少し離れたところにあるので、地元の連携を大事にしていきたい。もう一つは、毎年、下越美術教育研究会が主催の「教育アート展」という展覧会をやっており、これは学校一つ一つの連携ではなく一つの団体と共催して、子どもたちから美術館に来てもらう形である。

(大島委員)

資料を見て、新潟市美術館のほうは大きく一つ項目立てをしている一方、新津のほうは別々に入り込んでいたため、重要度が違っているのだろうかと思い質問したが、両方とも子どもたちの美術に対する関心を起こすために一生懸命やっている気概を感じ取れた。

(中山副会長)

今まで1プラス1が2だったのが、2プラスアルファになって良かった。その中で、コレクションの充実と有効活用のところで、市内の小規模館との連携強化とか、例えば助言などをやったほうがよいのではないか。

また、新潟は環日本海と言って、北東アジア諸国との関連があるので、年に1回程度、例えばハバロフスクの美術館から持ってきたり、こちらから行ったりということを公言し実行する必要があるのではないか。

新津の、展覧会の充実のサブカルチャーは、「サブカルチャー」という言葉だけではなくて、特に新津は小回りが利くので特化したほうがいいのではないか。

(宮田会長)

海外から若者たちが、サブカルチャーが日本中にあるのかと思って来るが、どこに行っても見あたらないということがある。私は今、江戸東京博物館にそれを特化して持っていくようにと竹内館長に申し上げているが、同時に新潟のこの館にあるとなったら、観光にもなる。美術館は観光の資源でもあると思う。

(福永委員)

学校の連携に関連して、これは部会でも連携や役割分担をどうしていくかにつながっていくのだが、新津の場合は地域のことを意識している感じを受ける。今日開催中の展覧会などは、地元にも密着したテーマという気がする。今後、新潟市全体をエリアとするのか、あるいは地域をすみ分けするのは難しい問題だが、新津の意識としてはどうか。

(横山館長)

新潟市は8区あるので、今年度は秋葉区、来年度は江南区、その次は別な区で行いたいと考えている。

(福永委員)

地元のことを意識して活動したいということか。

もう一つ、新津で特徴的な取り組み「こどもタイム」や託児サービス、「あいてマンデ〜」の利用者はどの程度か。

(小林副館長)

託児サービスは、年間20から10組程度。ミュージアムコンサートや講演会を夜間に開催する際などは、小さいお子さんがいてコンサートになかなか行けないという若いご夫婦などに活用していただき、必ず毎回あるものではないが、それを楽しみにする方もいらっしゃる。

「こどもタイム」は、その日の人数が普通の日よりも何割か増えるということはないが、「こどもタイム」ということを分かって来館される方もアンケートを見るとかなりの割合である。

「あいてマンデ〜」も、普通の平日と数自体は変わらないが、逆に、休館のはずの月曜日にもかかわらず、ほかの平日と同じくらいの来館ということは、ある程度認知されていると言える。

(福永委員)

せつかくの取り組みなので、広報による周知が必要だろうと思う。月曜日の開館や託児サービスを、少しお金をかけてでも広報していくことが大事なのではないか。

(大島委員)

託児サービスは有料か。おやつなどは親御さんから持ってきてもらうのか。

(小林副館長)

利用は無料。おやつを食べさせたい方からは持ってきていただいている。ボランティアのサークルにお願いをして、実費をサークルにお支払いしている。

(大島委員)

部屋はどこにあるのか。

(小林副館長)

館内ではなく、正面の道路をはさんだ反対側に建物があり、まずそちらに寄ってお子さまを預けていただく。

(大島委員)

事故その他のことで保険などはかけているか。

(小林副館長)

かけている。

(大島委員)

私どももやっているのですが、参考までに、食物アレルギーに関して、ボランティアの方たちにお伝えいただきたい。子どもなので、目を離した隙に、人が持ってきたものをほしがって食べてしまい、それがたまたまその子のアレルギーだったという事例もある。食べ物や飲み物に関して、子どもを預かるときはより一層気をつけなければいけない。

(小林副館長)

事前に、申し込み時点でカルテのようなものを送り、アレルギーなどの必要事項を記入したうえで当日来ていただいているが、今後とも気をつけたい。

(宮田会長)

ホームページについては、どのくらいのアクセスがあるのか。

(横山館長)

ホームページは、現在、15万くらいのアクセスがある。

(中村委員)

新潟市のホームページの検索で、新津美術館とか、企画展のテーマで検索すると、昔のログに飛ばない。検索してヒットしてもそのページではなく新潟市のトップページに行くので、何とかしてほしい。

(横山館長)

市の広報課に再度伝えたい。

(武田委員)

2月9日付の新潟日報に、公立美術館は冬の時代、と出ていた。内容は、厳しい財源で企画も困難であると。去年から比べると今年の予算は、少ないのか、多いのか、その辺を聞きたい。

それから、「時代に即した弾力的な美術館経営」ということで、新規の外部来館者を増やし、リピーターを獲得するための仕組みづくりとあり、その中身を教えていただきたい。

関連して、新潟と新津の美術講座を各1回ずつだが受講して感じたのは、学芸員の段取り、進行が非常によく、ぴったり1時間で、大変有意義な時間を過ごさせていただいた。開催がほとんど土曜日だったが、私ども退職した者にとって、平日に1日くらい設定していただけたらと思う。

(井関副館長)

観覧者数については、平成24年度は12月末までの数字だが、常設展と企画展を合わせて約9万弱の入館。平成23年度は年間で6万6,000人。今年度は、草間彌生展の効果があつたのではな

いかと思う。平成 22 年度についてはいろいろと問題があったこともあり、休館などもあったが、4 万人ということで、今年度は集客の面では、数字は上向いている。

(塩田館長)

美術館冬の時代というのは 10 年以上前から言われていることで、どこの美術館も知恵を絞りながら、予算を工面しながらやっていると思う。新潟市美術館も、新津も、決して潤沢な予算ではない。来年度の展覧会予算も、数字だけを見るとけっこう大きいですが、実行委員会ということで地元のメディアにも出資していただく展覧会が 3 本ある。例えばサザエさん展などは 1,200 万円の予算だが、新潟市が負担する分としては 600 万円。いろいろと頭をひねりながらやっている。

リピーターの話も、美術館に来たことがない方も大勢いらっしゃる。そういう方にまず美術館を知っていただく。一度来たことのある方にまた来たいという気を起こしていただくためには、展覧会の内容はもちろん、それ以上に、居心地のいい美術館である、来てよかったという思いを持っていただきたい。この辺は 30 周年の改修のときには賑わいを創り出すということも含めて考えていきたい。

(野川委員)

私は江南小学校に勤めている。学校向け教育普及事業について、三つの事業をやっていたいており、大変ありがたい。昨年、江南小学校 30 周年記念があり、学校の展覧会の日とあわせて新潟市美術館の出前授業で作家の方に幾つか作品を持って来ていただき説明をいただいた。6、7 歳児の子どもが、純心というか、1 時間くらいだったが、ずっとそこに来て、作家さんといろいろと話したり質問しているなど、非常に効果があったと思い、期待している。

昨年は 7 校、今年度は 11 校ということで、出前美術館のほうは要望があれば際限なく来ていただけるものなのか、教えてほしい。オープンギャラリーについては昨年は 10 校、今年 11 校ということで、これはバスの費用もあるので制限があると思うが、上限までいっているのか、ということも聞かせてほしい。

我々は、直接的には小学校の勉強をしっかりと教えて中学校へ送り出すのが仕事。将来にわたって必要な資質を勉強するのだが、教育は先行投資だという考えもある。美術館も、たとえゴッホやピカソが来たとしても、小学生のうちに何かで利用したという経験が全然ない大人が足を運ぶかといえば疑問だ。やはり小学校のうちに利用した、行っておもしろかった、などの経験は大人になっても残る。オープンギャラリーで美術館に来て学習出来た子どもは非常に幸福だと思う。市内小学校、中学校の子どもの、ほんの一部しか経験できない。それでも可能な限りやっていたいのでありがたいと思う。

先ほど、新津美術館で新潟教育アート展の子どもの展覧会に館を貸している話があったが、昨

年まで私は下越美術教育研究会の会長をやっており、その間4回使わせていただいた。2週間くらいの会期中に4,500人くらいが来てくれる。新潟市内だけではなく村上市などからも子どもと家族とで来てくれる。先の館事業のほかにも、子どものコンクールなどを美術館で開かせてもらうのも、大人になったときに美術館を利用する可能性の芽を与える機会になっていると感じる。

(井関副館長)

教育普及事業については、年間何回という予算の組立にはなっているが、好評な事業であり、ほかの経費から捻出するなど、なるべく要望に沿えるようにやってきた。バスについては今年度予算は6回分だったところを、来年度予算は8回分と、当初予算面でも実態を踏まえ反映させた。さらに実際に予算執行していく中でも、可能な限り要望にお応えしていきたい。

(大倉委員)

私は1985年から1990年まで新潟市美術館で学芸員をしており、以後、フリーになって、2000年からは「新潟絵屋」という画廊をやっており、年間30回ほど若い作家を含めた個展の企画をやっている。2005年からは「砂丘館」という新潟市の古い歴史的な建物を使った小さい美術館を運営しており、そこでもさまざまな企画展を開催している。

そういう立場から、改めて美術館というのは、以前はいろいろないいものを外から持ってきて市民に紹介することが大きな役割であった。今もそれは大きな役割だが、このように新潟に画廊が増え、地元在住の作家たちが地元で発表して、いい仕事をする若い人たちも増えたのを見ているので、すぐには言わないが、そういう人たちもやがて美術館とつながるといいなと思う。

来年度は新潟市美術館では新潟出身の若い作家たちの企画展を開催する予定とのことで、新津美術館では日本画のキャリアのある方々の展覧会ということ。新潟市の美術館の企画展の充実の中に、地域において顕彰すべき作家を対象とした展覧会の開催、とあるが、「顕彰」という言葉だと遺作展という形でやることが多いし、今も新潟市美術館でやっているが、今活躍して、しかも新潟で発表している人たちも企画展の中に取り入れる試みがあってもいい。そういう意味では顕彰というよりは「評価」とか「注目」という言葉のほうがいいと思う。同じような方針を新津美術館にも入れていただければうれしい。

もう一つは、新潟市美術館のすぐ近くに「砂丘館」があり、うちの館と美術館、近くに「旧齋藤家別邸」というお屋敷で去年6月に開館し3万人ほどが来ているという施設もあり、會津八一の記念館などもあり、それら文化施設と連携しての会議を、新潟市美術館を会場に昨年から開催している。美術館単館で人を呼ぶだけではなく、地域一帯で人が賑わうという面も大事だと思う。新津については、隣の県立植物園の外部評価委員をしているが、こちらもいろいろな施設があり、来る人々が単館だけではなくてほかの館を見るような工夫や、地域にある他施設との連携も大事

だ。ホームページの話が出たが、地域のホームページからアクセスできるといい。この辺だと植物園や、このあたり一帯の共通のホームページを作って、そこから各館にリンクできるような形もいいのではないかな。

先ほどの「あいてマンデ〜」は、とてもいいネーミングだし、一つの館でとてもいいというもののはほかの館でやってもいい。新潟市新津美術館が始めた独自の企画ではあるが、もしよかったら「あいてマンデ〜」を新潟市美術館もどこかの時点でやるといいのではないかな。

(宮田会長)

なるべく即戦力のあるものをとるところに毎年ニュースソース的に入れるようなことがあってもいいと思う。東京都美術館だが、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」では、女優の武井咲さんに同じ格好をしてもらったり、都美館なので「とびラー」など、若い人たちを集めたりしてやっている。「あいてマンデ〜」のように、ぜひ両館も発信してほしい。

(降旗委員)

内容がかなり練られてきている。それぞれ展覧会の内容もメリハリがあって、人の入る展覧会と研究的な展覧会、市民に親しまれると言える。新潟市美術館と新潟市新津美術館の名前に「新」という字がたくさんある。連携がずっと話に出ているが、二つのパンフレットを見ても、連携というのが見えにくい感じがする。何かキャッチになるような連携的なマークか、共通するイメージがあってもいい。例えば「新」という字が三つあるのをうまく使ってグラフィックができるとおもしろい。それが一つあって、その中に新津美術館と新潟市美術館があるという、グラフィック的なメリハリがあるともっとはっきりしてくる。

運営の企画のことだが、新津の立地というのは、植物園や、埋蔵文化財センター、弥生の丘展示館がある。今日私は埋蔵文化財センターを見てからこちらに来た。新潟県の施設だが、すごくおもしろい。新潟が置かれている意味、例えば鉄、漆といったいいキーワードがたくさんある。先ほど環日本海の連携といった話も出ていたし、もっと日本海側というものを市として発信していくといいのではないかな。近くに植物園もあり、使えるものが新津にはあるし、それを利用して、アピールしていくことも必要ではないかな。

大原美術館が「チルドレンズ・アート・ミュージアム（チルミュ）」という企画をやり、子どもたちを呼び込んで、毎年大きくなっている。大原美術館の特色を生かした企画だが、そういう形での利用が十分できるのではないかと、こちらの美術館に関して感じた。

新潟市美術館のほうは、この前の部会の際に伺って、周りには、ちょうど「水と土の芸術祭」をやっていた「砂丘館」や、非常にいい施設があるのを感じたし、そういう連携が大事なのだと思った。建築的には、前川國男の、結構いい時期の美術館の建物ではないかと思う。建築という

ものも生かしながら、例えば建築ツアーとか、うちの美術館などもやっているが、そういったやり方でほかの人たちも呼び込むことが可能なのではないか。

教育普及について、おもしろいネーミングもあったが、方針とか来年度の企画を見て、少し堅さを感じた。美術館の役割としては、美術の普及、美術館の普及という大きな目的だけではない、美術を使った人間性の回復みたいな、社会教育の意味で、今は情報を受け身の状態の子どもたちが多く中で能動的な子どもたちをつくっていくという発信の仕方がもう少し求められてもいいのではないか。私どもの美術館も25年経ち、最近では、最初に参加した子どもたちが大人になって戻ってきてくれる。能動的な視線をつくっていく社会教育的役割も、美術を通した一つの美術館の役割。上から目線ではなく、吸い上げるような、同じ目線で考えていく普及活動がもっと必要なのではないか。

(菅井委員)

(講師として) 出前美術館を担当して、とても疲れた。けれども、これはやっていかないと。私は38年間の教員の現職が終わってからすでに13年経っており、子どものところに行ってやるというのは大変だった。小学校にも幼稚園にも行くが、美術館の役割は見せてやるのではなくて、おいでいただく、どうぞという発想でないといけない。見せてやる、見ろと言われるような気がする。そうではない発想に変えていただくために、今後も話し合いをお願いしたい。

30周年改修とのこと、21、22歳のころから市立美術館に関係してきたものからすれば、もうそんなに時間が経ったのかと思う。市長から頑張ってもらって、議会に少し余分にお金をとってもらおうといい。館長はご苦労様だがよろしくをお願いしたい。

(宮田会長)

出前美術館というのは大変な労力を要すると思う。

今回の協議会において、確実に階段が上がっている感じがする。最初に来たときと比べ、非常に前向きな動きが出てきている。まだまだだが、未来が見える感じがする。同時に、部会の委員の皆さまにはご苦労をおかけするが、いろいろなお知恵をだしていただけたらと思う。最後に改修の話も出たが、これがまた一つの大きなチャンスになると思う。

連携してつながっていくとの意見が出たが、上野地区もそういうふうにして、大きな特区をつくろうとしており、それが「あいうえの」のまち。ほかの館で並んで待っている間に空いているところへ行く。動物園へ行ってから、その後に行ったときにすっと入れる仕組み。ディズニーランドで、長く並んでいるときに出るチケットがあって、1時間後にそこへ行くとすっと入れるシステムがあるが、そういうことも考えている。

新津だと、鉄道を活用しないと。JR東日本の車両製作の工場を見学できる。私が新津美術館に来る理由の一つにそこへ必ず行くということがある。夢中になっている人は多少遠くても行く。

花があり、鉄道があり、そして美術館と、この3つを1日で回るのは良い。

## 5 閉会挨拶

(塩田館長)

新潟市美術館、新津美術館、生い立ちも立地環境も異なる両美術館を対象とした協議会ということで、私どもは部会も含めて迷い、悩むところもあったが、皆さまの率直かつ複眼的な視点からのご意見を今後の美術館活動に役立て、一步一步、少しでも活気のある、明るい美術館をつかっていきたい。本日はありがとうございました。